

都道府県別賞一等

生きる「お守り」

北海道 札幌市立篠路西中学校 一学年

近藤 舞桜

世間が「新型コロナウイルス感染者数過去最高」を叩き出した二月、家族全員が新型コロナウイルスに感染した。私は母子家庭なので働き手は母しかない。そんな母の症状が一番重症で療養期間があけてもすぐに復職することはできなかった。母は自分が病気なのに、毎日気にしていたのは、私たちのご飯や学校との関わり、職場への対応、そして「今後の生活」のことだった。

そして一番衝撃的だったのは母が「自分が死んだ時」の話をしてきたことだ。いくら重症とはいえず今すぐ生死に関わるほどなのかと驚いてしまったが、母の考えはそうではなかった。母は、「もし自分に万が一のことがあったら」と生命保険の存在を教えてくれた。そして、この新型コロナウイルスに感染して自分が働けなかった期間を生命保険で保障してもらえらるから安心するよう言われた。私は毎日活が終わると当たり前前に家に帰り、漠然とご飯を食べ、お風呂に入り、何気ない生活をしているだけで、母がいなくなった時のことや、母が働けなくなった時のことは今まで考えたことがなかった。そんな母親の姿を見て、これが家族のリーダーとしての「責任」なんだと感じた。

国も新型コロナウイルス感染者に対して色々と生活支援をしているが、それはあくまでも新型コロナウイルスという未知のウイルスが出現したから行われている支援策であって、それ以外の私的な事故やケガに対してはもちろんほぼ保障がない。

生命保険は本人を守るだけでなく、家族の「今後の生活を守る」「生きるために使われる」「お守りなのだ。そして今回、その存在は普段感じられるものではないが、万が一の時に「生きる選択」をさせてくれる唯一の手段でもあると強く感じた。

新型コロナウイルス感染症が完治し、元気に働きに出る母の後ろ姿は、家族のリーダーとして、より一層大きく見えた気がした。